



砧あんしんすこやかセンターの取り組み

令和2年9月25日(金)

第8期世田谷区高齢者保健福祉計画・

介護保険事業計画素案シンポジウム

砧あんしんすこやかセンター 山本 恵理

あんしんすこやかセンターとは

- 介護保険法に基づく地域包括支援センター
- 高齢者のための相談窓口
- 障害者、子育て家庭、生活困窮者等の一次相談を実施
- 世田谷区が社会福祉法人等に委託して運営
- 区内に28ヶ所（担当区域はまちづくりセンターと同じ）
- 社会福祉士・主任ケアマネジャー・保健師等の専門職員を配置



身近な福祉の
相談窓口です。

1 伴走型支援

- 住民の抱える課題が複雑化・複合化し、既存の福祉サービスにつなげるだけでは対応できなくなっている。
- 継続的につながり関わりながら、本人の生きていく過程に寄り添う支援が求められている。

(事例)

複数の場で、自分の思うとおりにならないと怒鳴っていた男性。
「お前たちは何もやらないんだな！」

経済的な困窮、家族問題、健康問題、生きづらさがあり、ずっと理不尽に扱われてきたという思いを抱えていた。

状況の整理、相談窓口の同行などにより、まずひとつの課題を越えたら・・・「支えてきてくれた人たちのおかげだよ」

2 8050問題

- 子どもが引きこもったまま中高年になり、生活を支えてきた親も高齢になり、孤立・困窮する世帯
- 誰にも相談できず20～30年経過していることも少なくない。
- あんしんすこやかセンターが対象を限定せず一次相談に対応するようになったことで、親ルートからの把握が進んだ。

(事例)

息子「僕は引きこもりじゃありません」

母親「この子の将来が心配。誰にも分かってもらえなかった」

息子は愛の手帳を取得し、通所の就労訓練や後見制度の利用へ。一方、母親の葛藤は続く。

3 医療と介護の連携推進

医療と介護の両方が必要になった高齢者が、住み慣れた自宅で暮らし続けたいと望んだら、それが叶えられる地域の仕組みを構築する。

■ 在宅療養相談窓口として

(例) 親族から相談「人工透析が始まってそろそろ退院と言われたけれど、家は足の踏み場もない状態。どうすればいいのか」

■ 多職種事例検討

(例) 医療や介護を拒否する高齢者の今後の生活について、医師や看護師などの医療関係者と、ケアマネジャーやヘルパーなどの介護関係者がともに話し合う。

4 住民の自主的な介護予防活動

- 住民が自主グループを作り、週1回「世田谷いきいき体操」などに取り組んでいる。
- 活動実施の中で把握した住民の困りごとをあんしんすこやかセンターにつなげるなど、福祉相談のミニプラットフォームとしても機能している。

(新型コロナウイルス感染流行の影響)

中断を余儀なくされているグループもある。

感染予防を徹底し、人数を半分にして同じ活動を2回実施したり、お茶とおしゃべりは止めたりして再開したグループも。

「出不精になってしまった」「体力が落ちたと感じる」「転びやすくなった」「だからこそ再開しなくては」「でも感染は不安」

5 「支える側」「支えられる側」という関係を超えて

■ 「認知症高齢者の家族の会」

認知症高齢者を介護する家族は、介護ストレスや孤独感を抱え込みがち。同じ立場同士だからこそ思いを分かち合い、支え合えることがある。

■ 会に参加して「話したいことを話せてスッキリ」「勇気をもらいました」「ホッとしました」

→ 会の出席者が力をつけ、「支える側」へ

(「支える側」としての活動)

他の介護者の悩みを聴く

地域づくりの会議で意見を発信する

地域の講座で介護経験を伝える

6 新たな支援のあり方を模索して

■「地域ケア会議」

地域包括ケアシステム(まちぐるみの支えあいの仕組み)を進める話し合いの場

オートロックマンションに住む高齢者がリフォーム詐欺に遭ったが、なかなか気づかれなかった事例

消費生活センター、警察、介護サービス事業所、世田谷区等と再発防止を話し合う。オートロックマンションに住む高齢者の見守りを地区課題として把握。

マンションの管理会社や理事会と連携ができないか模索して、住民への聞き取りや管理人室への挨拶まわりを開始。